

点。パズルのような手作業の復元を十九年前に始めたが、これまでに完成したのはたった3%。迅速を図るため、昨秋から「Eパズラー」と名付けたいソフトを導入した。(ベルリン・宮本隆彦)

# 元のパズル



ベルリンで、断片を手で仕分けする復元作業—宮本隆彦撮影

## 6億ピース▽4千万枚文書に

に合わず、旧東独市民取り囲んで減を阻止。の断片が大

### 9年費やしまだ3%

量に残された。本部跡での復元は九五五年に四十人体制で始め、現在は十一人で続けている。集めた断片をテープで張り合わせるワルトラウト・シエンクさん(左)は「旧東独には理由も分らないままシュタージに生活や財産を奪われた人たちがたくさんいた。彼らが事実を知る手助けのため」と

す。ただ、人力での作業には限界があり、これまで処理できたのは、断片が詰まった一万六千袋のうち、わずか五百袋。このままのペースだとあと六百年近くもかかる。関係者が生きているうちに復元を済ますには、大幅なスピードアップが欠かせない。その切り札がE

大手ヘッドハンティング会社、サーチファーム・ジャパンが主催する「ブラジル進出支援ビジネスセミナー」が一月末に東京都内であった。会場は満席。出席者は講師の話に熱心に耳を傾けていた。

日本の二十三倍の国土面積を誇るブラジルは、原油やバイオエタノール、鉄鉱石など天然資源が豊富。三十歳未満の若者が人口の五割を占め、労働力にも事欠かない。今年六月にサッカー・ワールドカップを、二〇一六年にリオデジャネイロ五輪を控え、熱気に包まれる。

一〇一一年にブラジル日本商工会議所の会頭を務めた中山立夫氏は「長期的な発展が期待される」と言い、潜在力の高さ以太鼓判を押す。サーチ社によ

### デスクの眼 リスクとチャンス

ると、進出を検討する日系企業が増えつつあるという。

ただし、すべてがバラ色というわけではない。進出企業にとっては、公共インフラの未整備や複雑な税制など、いわゆる「ブラジルコスト」が待ち構えている。特に一九四三年に公布された労働法は、過剰な労働者保護が指摘され、ブラジルの労働問題に詳しい二宮正人弁護士は「労働訴訟が後を絶たない」と話す。

だが、有望市場だけに進出に二の足を踏んでいると欧米や韓の企業に先を越されかねない。新興国への進出には、ある種の思い切りの良さが不可欠。リスクはチャンスの裏返し。ブラジルで活躍する日系企業が増えてほしいと思う。(藤川大樹)

### スピードアップへIT導入

で読み取ってデジタル化し、専用ソフトで形が合う断片を探し出して画面上で自動的に復元する。二〇〇七年からフラウンホーファー研究所が開発を始め、一三年秋から試験運用を始めた。一五年までに四百袋を処理する目標だという。

連邦シュタージ文書管理局のニールス・セバステアンさん(右)は「自分の文書を見たい、との問い合わせに答えられないのはつら

を出ると電話で助けを求めた警察と銀行は「1時間待つて」。女性は「もう、信じられない」とかんかんだ。(共同)

2月12日(水)  
東京新聞  
中日新聞  
(タ刊)  
5面